

警 官 汚 職

読売新聞大阪社会部



警官汚職

読売新聞大阪社会部

警官汚職

読売新聞大阪社会部

昭和五十九年八月三十日初版発行
昭和六十一年十一月二十日七版発行

発行者 角川春樹

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社宮田製本所

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二一十三一三

電話 営業部〇三—二三八—八五二一
編集部〇三—二三八—八四五—



振替口座東京三一—九五二〇八 一〇二
落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan ISBN4-04-883163-1 C0095

警官汚職

目次

第一章	警察学校卒業式	七
第二章	警官逮捕	一九
第三章	防犯部長	四〇
第四章	刑事部長	五五
第五章	取調室	六四
第六章	巡查部長の自殺	七
第七章	曾根崎警察署	九四
第八章	夜回り	一〇九
第九章	刑事の家	一二〇
第十章	女性記者	一二五
第十一章	前本部長自殺	一四六
第十二章	不気味な構図	一七六

第十三章 新たな逮捕者——一九

第十四章 疑惑を追って——一九

第十五章 ある男——二三

第十六章 国会質問——三七

第十七章 OB警官たち——四〇

第十八章 処分——五一

第十九章 遺書——五九

第二十章 点と線——六八

第二十一章 A代議士——七七

第二十二章 兵庫県警ニセ調書——八九

第二十三章 警察殉職者慰霊祭——三〇三

あとがき——三五

装丁 浅葉克己

その日の大阪は、連日の寒さがややゆるんだ。

昭和五十九年二月十六日午前十一時。大阪高等裁判所一〇〇二号法廷の被告人席に、一人の男が立った。元大阪府警曾根崎署防犯課風紀捜査係巡查長・清田高弘（三十九歳）である。

紺の三つ揃いスーツに薄水色のシャツ、明るいブルーのネクタイが、長身瘦軀のこの男の印象を清潔で明るいものにしていた。やや長目の頭髪にはきれいにドライヤーがあてられていた。濃い眉の下のそげた頬が、辛うじてこの男が刑事事件の被告という立場にいることを思い起こさせた。

「被告人は前に出なさい」と裁判長に促されると、清田は「ハイ」と歯切れのよい返事と同時に機敏に進み出て、現役警官時代と同じように、両手指の先まで伸ばして体につけ直立不動の姿勢をとった。そのあと「清田君だね」と、裁判長が君づけで呼んだのも、元警官らしい折り目正しい動作につられてつい出てしまったのかもしれない。

一審の大阪地裁は清田被告に対して、自己の職務に関して千百五十万円を賄賂として収受した罪により、懲役三年の実刑と同額の追徴金を課していた。

清田はその判決を不服として控訴した。趣意書のなかで、清田は控訴の理由をこう述べている。

「……前任の岸和田署に勤務していたとき、選ばれてピンクサロンの取締りの実務研修に曾根崎署に来た。同署管内の実態は憂慮すべき事態であった。この乱れた風紀に厳しい手を下さねばならない

との思いを強くし、研修の終わりに意見を表明したところ教官も全く同感した。希望を出して曾根崎署に転勤が認められ、熱心に防止及び取締りに励んだが、そのなかで見たものは同僚警官の許すことのできない光景であった。不正を正そうとする言動が次第に孤立・排除の包囲にあい……

昭和五十七年から八年にかけて、大阪を舞台に明らかにされた、警察史上まれに見る賭博ゲーム機にからむ警官汚職事件の主役の一人と目された清田は、一番で指摘された収賄の事実を認めながら、いま何を言わんとしているのだろうか。

第一章 警察学校卒業式

清田高弘・元巡査長の控訴審第一回公判が開かれた日から二年近く前の五十七年三月二十日、大阪は前夜からの雨が上がりきらず、あすはもう彼岸の中日というのに、朝からうすら寒い風が細かい雨粒をふくんで舞っていた。

市街の中心から北東へ約三十キロメートル離れた生駒山の麓、^{ふもと}「落花の雪に踏み迷う交野の春の桜狩り」と太平記にうたわれた交野市の東端にある大阪府警察学校の校庭も一面のぬかるみとなって、せつかくきょうの卒業式のあとに予定されていた卒業生四百七人に対する本部長視閲も屋内体育館に變更されることになり、関係者を残念がらせていた。

昔、軍隊では閲兵^{えいへい}という儀式があり、元首や司令官、上官はことあるごとに隊員を整列させ見まわったが、視閲はその閲兵にあたり、組織の規律を重んじる警察においては重要な儀式なのであった。卒業式の開始時間である午前十時にはまだ三十分近くあったが、来賓待合室にあてられた本館二階の校長室には、もうほとんどの来賓が案内されていた。

窓の外は生駒の山なみがすぐそこに連なっているのに、雨の向こうにかすんで遠く見えた。杉原正・大阪府警本部長は、その窓ぎわに立って校庭を見下ろしていたが、来賓の一人である読売新聞大阪本社社会部長・黒田清の姿を見つけると、

「やあ、黒田さんは卒業式、はじめてでしょう」

と声をかけた。

「ええ、毎年すばらしい式だとは聞いていますが、出席させていただくのははじめてです」

「せっかく来ていただいたのに校庭が使えなくて残念です。体育館で視閲はやりませんが……」

しかし杉原の表情は言葉ほどには残念がつてはいなかった。濃い眉の下の大きい目はいつものようにおだやかに微笑んでいて、白くて端正な顔立ちには誰の目にも上機嫌に見えた。

杉原は島根県簸川郡斐川町出身、旧制松江高校、東大をへて昭和二十八年、いまの警察庁にあたる国家地方警察本部に採用された。

日本の警察は、昭和二十五年以降、採用が極端に少なくなっていたが、二十八年に採用基準を変えて大量採用を実施、ちょうど不況のドン底という就職難時代に学制改革により新制旧制双方の大卒者がどっと社会に出たこともあって優秀な人材が集まり、杉原ら二十八年採用組は「花のニッパチ組」と呼ばれた。

杉原が大阪府警本部長に赴任したのは五十五年四月だったが、同じ二十八年に京大を卒業した黒田とは同じ世代ということもあって、会合などがあると献盃を繰り返しながらよく談笑した。警察官としてはいわゆるゴツゴツしたところがなく、当たりのやわらかい人柄だが、大阪府警一万八千人の警官の長としての統率力はなかなかのものだとの評価が警察内外で高かった。

杉原が大阪に赴任したのはそれがはじめてではなく、四十六年八月から約一年間、府警交通部長を務めたが、四十七年七月、内閣総理大臣秘書官として、ときの総理、田中角栄に仕えるため東京に呼び戻されている。そのあと警視庁交通部長、警察庁人事課長、警察庁交通局長と、主として交通畑を歩いたが、同期生二十七人の出世街道では、五十二年に官房長に拔擢された山田英雄（現・警察庁警備局長）とトップを争い、将来は長官、総監に座る人物と目されていた。ロッキード事件の田中角栄

の秘書官を務めたことは、新聞記者仲間にも当然知られていたが、その経歴はマイナス評価よりもむしろ「そういうこともできる幅広く人脈に強い人物」というプラス評価が与えられていた。

この日の杉原は、四重織の金モール、金星三つを輝かせた礼肩章、両袖を金一本黒三本の縞織線しまかりせんで飾った礼服姿で、よけいに凛々りんりしく見えた。本部長だけでなく、平素はほとんど平服で過ごしている部長級の幹部たちも、礼服に身を固めて、年一回の晴れの行事を前にして、そろって上気した面持ちで来賓たちと歓談していた。

血色のいい顔色の防犯部長・山本勇二郎が黒田のそばにやってきて、大きい声で、
「きょうの朝刊、ありがとうございます。わたしもやつとこれでお役ご免ですわ」

と周囲の人たちにも聞こえるようにあいさつをした。

ちやうどこの日の朝刊大阪版に、府警幹部が二十三日に発令する異動の発表記事が掲載されており、その書き出しは、

〈府警は十九日、山本勇二郎防犯部長、梅本馨かおる警察学校校長らの勇退に伴う警部以上六百六十八人の異動を発表した〉となっていた。

われわれにすれば通り一遍の人事異動記事だが、山本にとってはなるほど感慨深い記事なのだろうなあ、と黒田は思った。

山本は終戦直後の昭和二十年九月巡查拝命、巡查部長、警部補、警部と階段を一段ずつ上がるようにして出世してきた。いわゆる上級公務員試験を合格した三級職のキャリア組ではない、叩き上げのノン・キャリア組としては最高の地位を占めての退職である。退職後の就職先もすでに決まっただけ、その表情が充足感に満ち満ちているのは当然と言えた。

そのことは警察学校長の梅本馨にしても同じであった。巡查拝命は山本より一年おそい二十一年だ

が、防犯部畑の駿足代表選手といわれる出世ぶりで大阪府警の港、住吉、布施、堺北各署の署長を務め、警察学校長を最後としての勇退だから、文字通りこの日の卒業式は、警官生活三十六年にして迎える最後の晴れの舞台だった。

「しばらくです」

黒田と山本の間、おだやかな声が割って入った。この日発表された幹部異動で、現職の警選部長から山本の後任である防犯部長への栄転が決まった赤坂侑だ。山本、梅本より少し年下の昭和二年生まれ。陸軍幼年学校から士官学校在学中に終戦、巡査になった。経歴はそのやさしい風貌に隠されているが、気取りも飾り気もなくここまで昇りつめてきたのは、一にも二にも誠実な性格が買われてのことだと、新聞記者仲間での評価だった。

「やあ、おめでとうございます」

黒田はすなおにあいさつを返した。七年前のことがさつと頭をよぎった。

五十一年春、黒田たちの社会部は第一級の情報を得た。府警交通部の指導警官たちが交通違反のみ消しを行ない賄賂を要求、多額の収賄をしているというのだ。当時、大阪の交通違反件数は全国一だった。そのなかで一線に立つ警官たちが悪質ドライバーと結託しているとすれば、こんなひどいことはない。社会部長になって一年たっていた黒田は、当然、社会部のなかに特別班を組み、徹底的に調査させた。もたらされた情報が事実だっただけでなく、違反のみ消しをして物を贈られたり飲み代をたかったり芸者遊びをしている警官が、十人程度ではないこともわかった。こうなれば警察官個人の問題ではない。警察という組織の問題だ。社会部は連日、交通汚職摘発キャンペーンの記事を連打した。

赤坂が黒田を社に訪ねてきたのはそのころのことだった。赤坂は当時、府警総務部参事官で、府警

本部長の使者としてやってきたのだ。来賓室で何時間話しただろうか。赤坂は低い声で訥々と訴えた。

「悪質な警官はたしかにいます。それらについては厳重に処分することを約束します。しかし連日のように新聞で交通汚職に関する記事を書かれては、大阪府警全体が腐っているように思われる。第一線で頑張っている立派な交通警官も大勢いるのに、彼らの士気にも影響することをわかって下さる」

そういったことを、赤坂は繰り返して言った。伏目がちに足元を見て語り、一区切りつくと黒田の目を見た。黒田が一言も返さずにいると、赤坂はまた別の言葉で訴えた。黒田は耐えた。目の前の警官は上司のためというよりも、警察という組織、警察官という人格のために、自分より年下の新聞記者に頭を下げている。そのつらさ無念さはよくわかった。返事をすれば訴えを容れてしまいそうな気がした。

新聞記者の仕事は、社会をよくしたい、多くの人たちの生活を悪から守りたい、そのために苦勞を重ねる。その点では警官と全く一致している。だから記者たちが苦勞を共にした警察官を好きになり、一生仲の良い友人としてつき合うことも多い。しかし警察官に対する親しみや尊敬の念と、警察に対する取材の姿勢は別なのだ。

二時間以上も対峙して、黒田は自分がこの警察官に好意を持ちはじめていることがよくわかった。その気持ちをはかりかきながら口を開いた。

「お話はよくわかりました。赤坂さんの警察を思う真情もよくわかりました。帰られたら本部長にそうお伝え下さい。だけど残念ながら私たちはこれまでと同じように調査取材をつづけ、事実とわかった警官の不正を書きつづけます」

赤坂は黒田を凝視した。その目に涙が浮かんでいた。黒田は目をそらして席を立った――。

あの交通汚職事件は、結局、国家公安委員会が下稻葉耕吉府警本部長ら幹部五人に対して「警察庁長官注意」「戒告」「長官嚴重注意」などの処分を行ない、同時に府警本部としては、収賄したり黒い交際をしていた十五人と監督すべき立場にある十八人の計三十三人を「戒告」「本部長注意」などで処分して終わったが、その事件で新聞社の鋭鋒を避けるための使者としての務めを果たせず帰った参事官が、七年後に防犯部長というノン・キャリア組としての最高の地位についたことに、黒田は正直なところホッとした気持ちだった。

この日の卒業式に出席を許された府警の各部長はいずれも警視長という高い地位にあるが、総務部長・河村一男、警務部長・加賀収、刑事部長・石田警史、警備部長・根本好教、交通部長・山崎毅らは、いずれも大学卒業と同時に上級公務員試験に合格、警察庁入りしたいわゆる三級職のエリートで、山本と赤坂だけが大阪府警の生え抜き部長であった。つまり大阪府警では、部長のうち従来は警邏と交通の二つを生え抜き組のポストとして用意していたのだが、交通部の重要性が高まるにつれて、交通部長を三級職ポストとし、そのかわりに防犯部長が生え抜き組ポストに変更されたのである。

この変更が半年後の汚職事件で一つの大きなポイントになるのだが、その時はまだ杉原本部長以下、幹部のどれもがその重要性に気づいていなかった。

「では来賓のみなさま、式場へご入場下さる」

来賓は副知事、府会議長、府警友会会長、府警察育英会理事といった常連がほとんどだが、マスコミ関係からも毎年出席することになっており、今年は毎日放送報道局長の柳瀬瑋と黒田が招かれていた。

府警音楽隊演奏の交響曲、惑星第四楽章「木星」が荘重に流れるなかを、来賓たちは引率されて講

堂に入った。講堂にはすでにきよう卒業して警察官生活の第一步を踏み出す学生四百七人が姿勢正しく椅子席を埋め、緊張した空気が場内に張りつめていた。

黒田は壇上向かって左側の来賓席に座るとあらためて場内を見渡した。卒業生たちはそろってキリリとした顔立ちをしていた。半年から一年間の寮生活は平均十九・六歳の若者たちを見事に鍛え上げているように見えた。

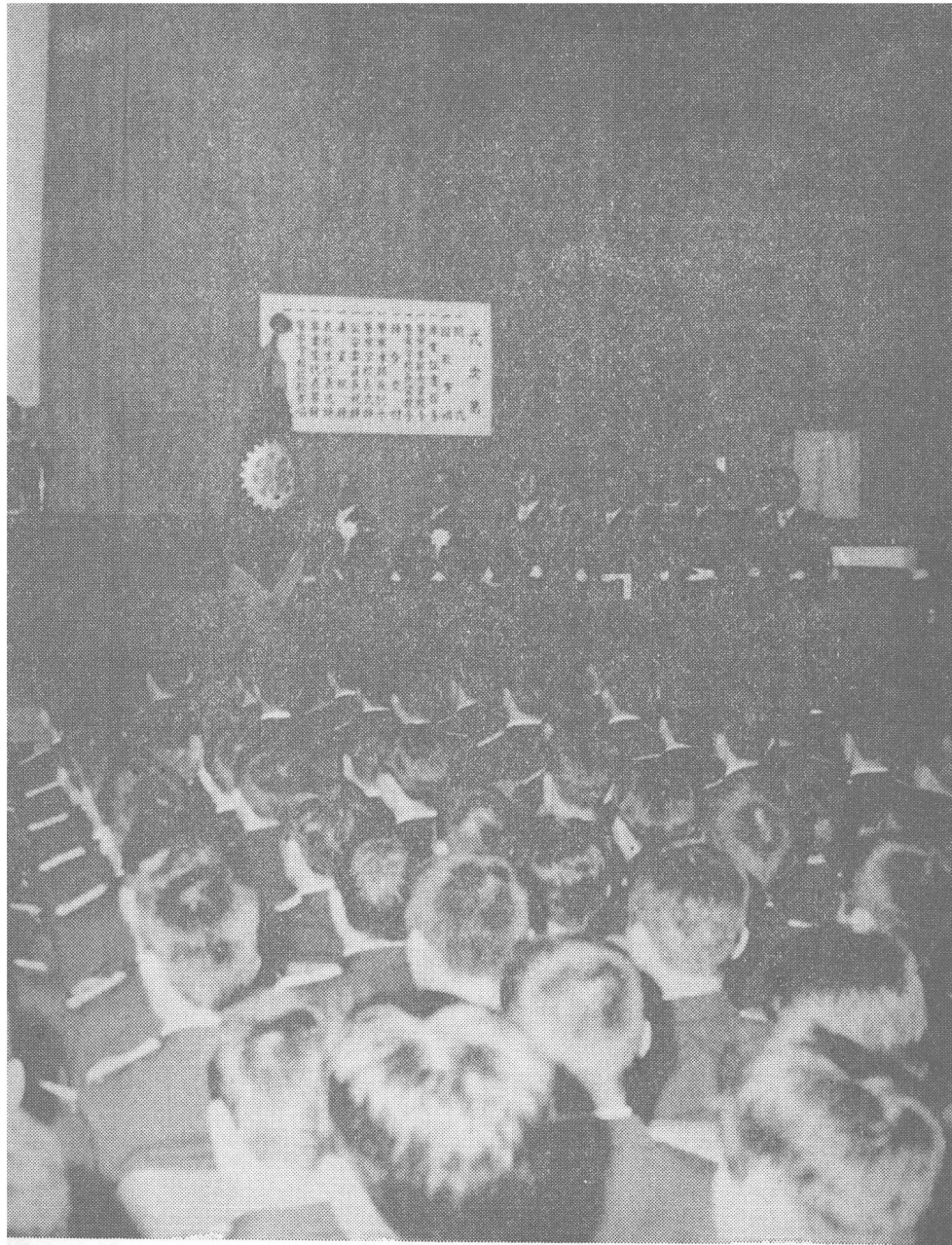
「気をつけ！」

立ち上がる動作にも腰掛ける動作にも寸分の隙がなく、そのたびにさっと空気がふるえて音を立てた。後部の席にはそんな息子たちを頼もしげに見ている父兄の姿が見えた。この日のために着なれない背広を着た年老いた父親や、式のあとで息子と一緒に食事をしようと重箱を大事そうにかかえている紋付羽織の母親がいて、黒田は胸をつまらせた。

警察学校は各都道府県にあるのだが、地方からわざわざ大阪府警への任官を希望してこの警察学校に入校した学生も結構多いのだ。この日卒業生代表として答辞を読むことになっている勝又安男にしても新潟出身で、在学中に道場で何回も何回も先輩に投げとばされ、やっと黒帯をとったときには新潟の両親に涙の電話をかけた経験を持つ。

ついこの間までは子供だと思っていた息子たちが、見違えるように成長して社会に旅立ってゆく。親たちはその姿を自分の目で見るために遠くからやってきたのだ。だれもがしわぶき一つせず、前方に並んだ若者の背中を見つめていた。

四百七人の卒業生のうち大学卒の七十人は半年間、他は一年間をこの学校で過ごした。もちろん全寮制である。授業内容は一般教育（訓育、国語、民法、郷土史、担任しつけなど）、法学（憲法、行政法、刑法、刑事訴訟法など）、実務（外勤、防犯、犯罪捜査、鑑識、交通など）、術科（拳銃、教練、



大阪府警察学校の卒業式は、一条乱れぬ厳肅な規律のもとに行なわれたが、目に見えぬところで腐敗がはじまっていた。